

假名垣魯文閣

之集

ふら

称

延

命

端々

二編

之保田彦作

流々

35

30

25

20



A461  
2

御届 明治十一年十一月十九日

出版人 日本橋通二丁目十九番地 大倉孫兵衛

編輯 久保田彦彦

画工 梅堂國政

48-8090



錦榮堂

と来一のそと延命草

久保田を伴はしむ

梅堂園の画のしく

正直捨方便の金言あり。衆生が迷ひの雲を拂ひ実説  
 勸懲の菊種あり。兒童を導びく編者其用意彼悉く  
 釋迦佛が法の聲なり。色ハ久保田が筆の活用妙法蓮華  
 の露以玉自我得佛の延命袋。如是本末を編終るに世評の  
 就鳥の靈山より高き声價の愛看みまゝ次出す第二の巻倍々  
 佳境に入船ハ如渡得船と即成就。小子も同氏と經机を  
 並べる寺屋朋輩ゆゑ。小言めいゝる佛臭ちのぐり序文のや  
 な題目講の半丁にか經の文句を並べて讀誦と給といふ

明治十二年二月

伊東橋塘記

菊重二ノ上

蓮葉の濁りた  
漆て於志気が  
探と破る丑之  
助が發心門



菊五郎の子尾上忍之助  
後又發心して延命院日道

心

初代嵐雛助の妻於志気  
実の桐山儀右五門の妹



浪華の俳優  
嵐重助  
後之  
二代目  
嵐雛助と  
ある





雛助の後見  
柵屋新兵衛



初編下の巻のつづき

初編下の巻のつづき

お袖の母の初めと

いひまゝなむ

寺の後代なる

彼道小松とうの世終る

まをる世もあはれなる

あはれなる世もあはれなる

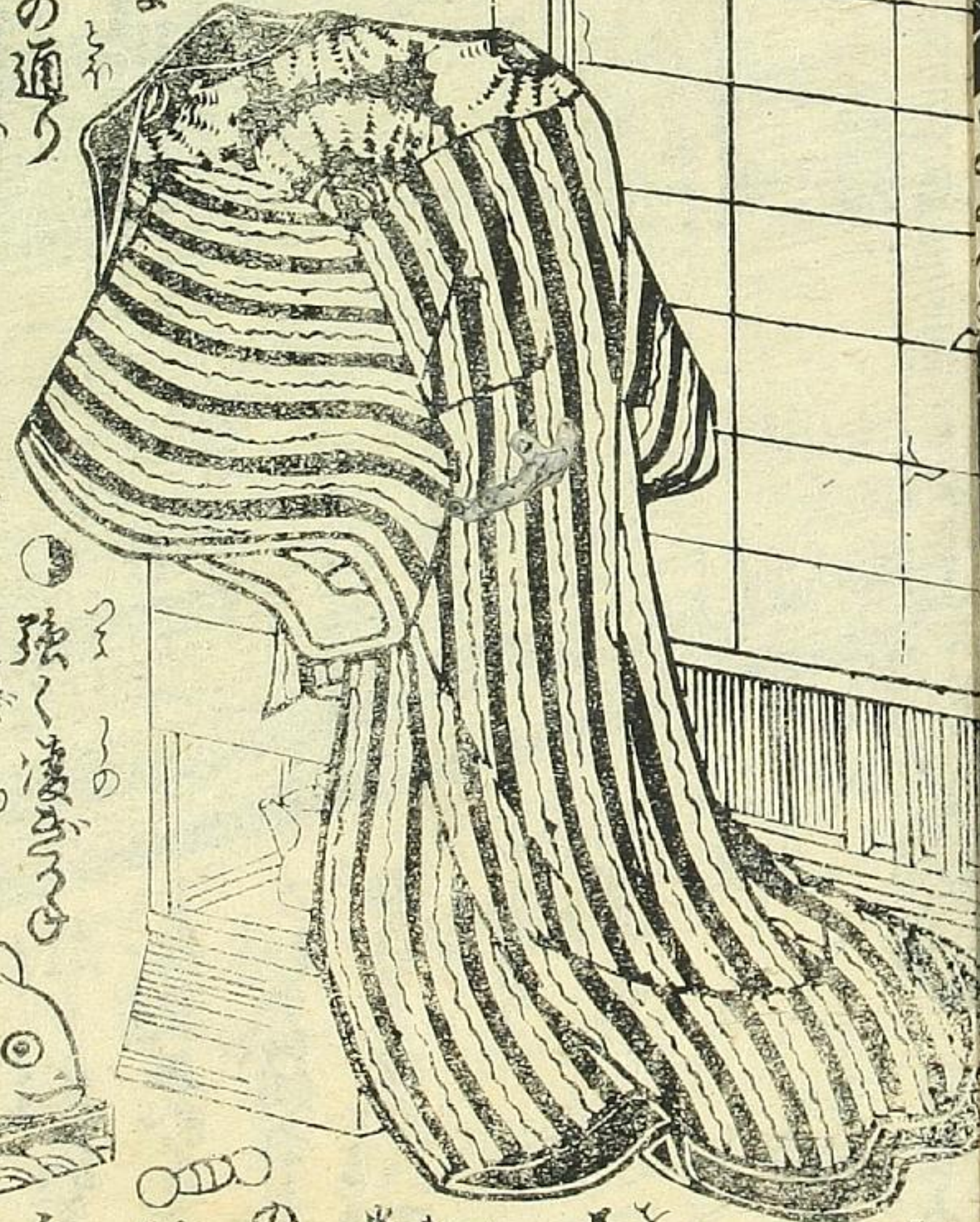
解ぬ人の度成夜道への側の通り

旧像の清くとかにつけてお袖の家

お袖の連形も借お似あはれなる

清く人目と厭ひく夜道なる

お袖のあはれなる



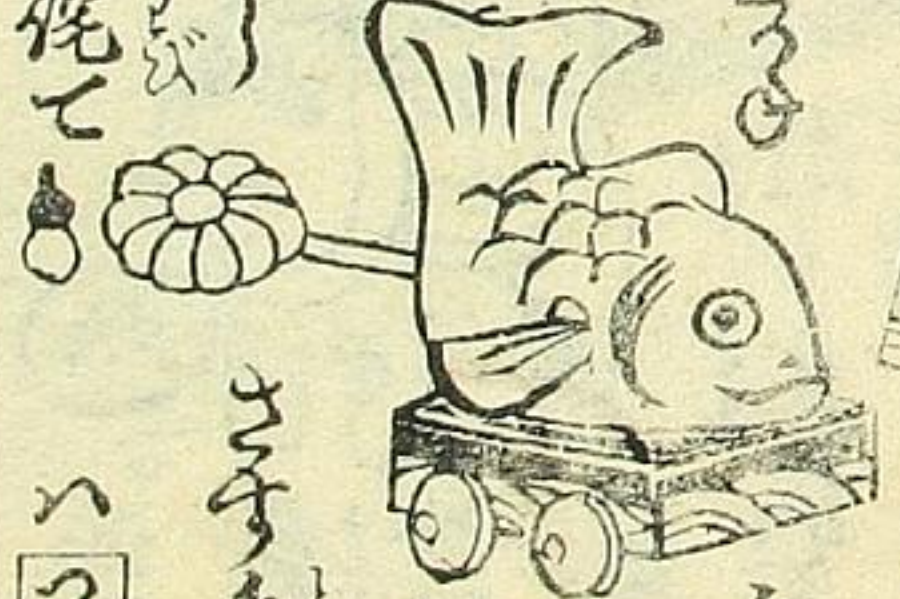
強く清く

お袖のあはれなる

お袖のあはれなる

お袖のあはれなる

お袖のあはれなる

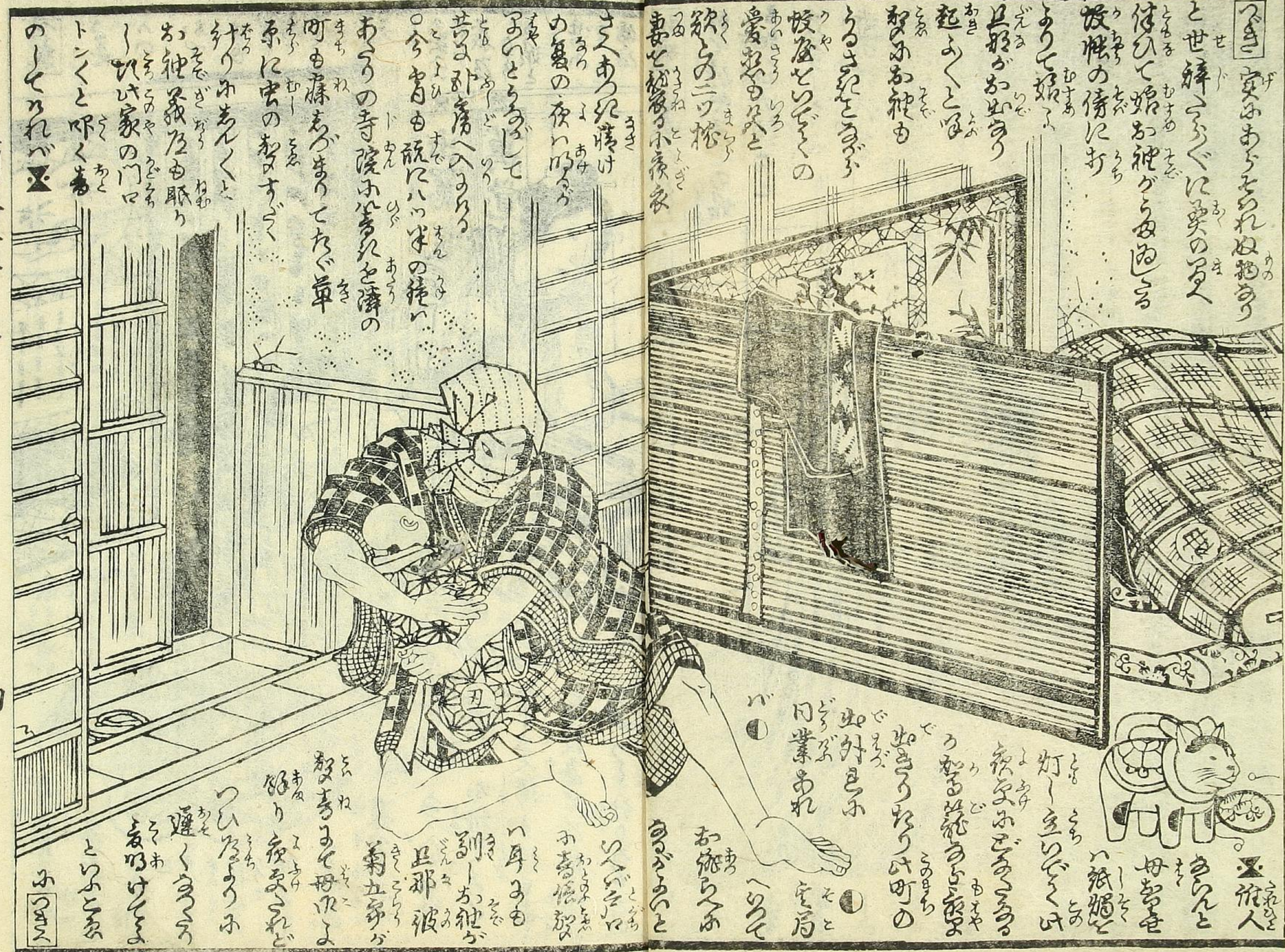


お袖のあはれなる

つぎ 冥途あはれなればぬれぬ  
と世解つるぐに奥の主人  
付ひて始お神がらぬぬる  
後帳の傍にお  
ありて始  
且ねがお出まり  
起ふくと家  
おぬお神も  
うらやまをいふ  
故なとていづの  
愛おの及と  
欲との二三  
妻と始お小夜家

さへあつた寝け  
の夏の夜のゆか  
あいつらあはして  
おのりお入る  
お今宵も能にハハの寝  
あつりの寺院おあつたを濟の  
町も森あつたまりてたぐ草  
系に虫のあつた  
針りおあつくと  
お神あつたお取  
けけ家の門口  
トシくと叩く者  
のしとれべ

新編 浮城物語



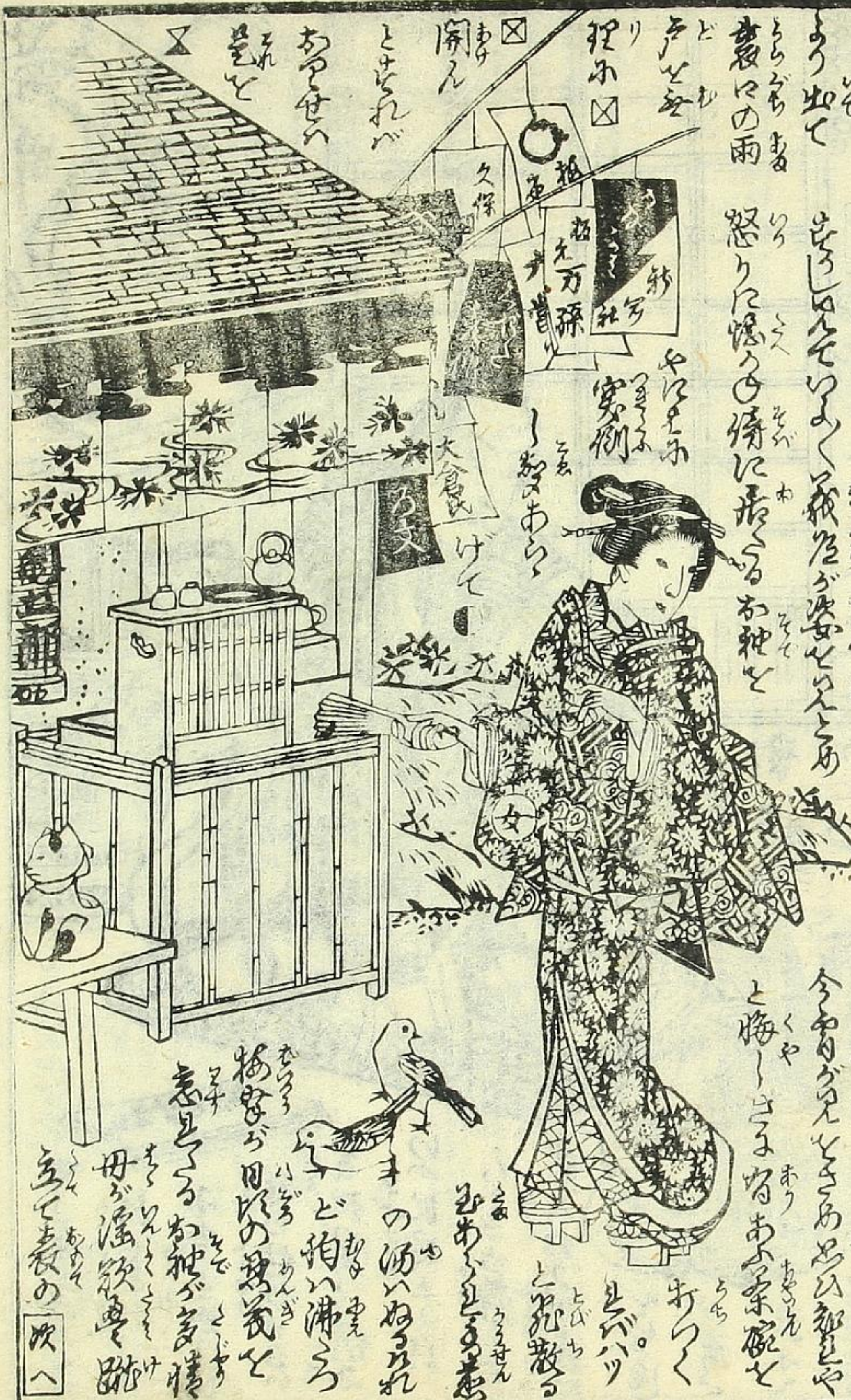
玉座人  
おん  
母を  
紙を  
灯り  
夜を  
おぬお神も  
うらやまをいふ  
故なとていづの  
愛おの及と  
欲との二三  
妻と始お小夜家

おぬお神も  
うらやまをいふ  
故なとていづの  
愛おの及と  
欲との二三  
妻と始お小夜家









葉重  
 二ノ上

六





新地

○遠のきお社の

びんか

○四條あり

余年子 余年子 余年子

# 菊の部

箱屋新地 菊子中

破りと窓の

か社うまげはも秋のり  
中一おあひ  
母のおあせ  
娘小遊あひのそ  
園うまをれと彼の  
随指と進むねとさすぐに  
お仲も春情あつた母の物と  
押久しおあひけりゆえなよ  
ニ夕月あつた日数と空しくまじ

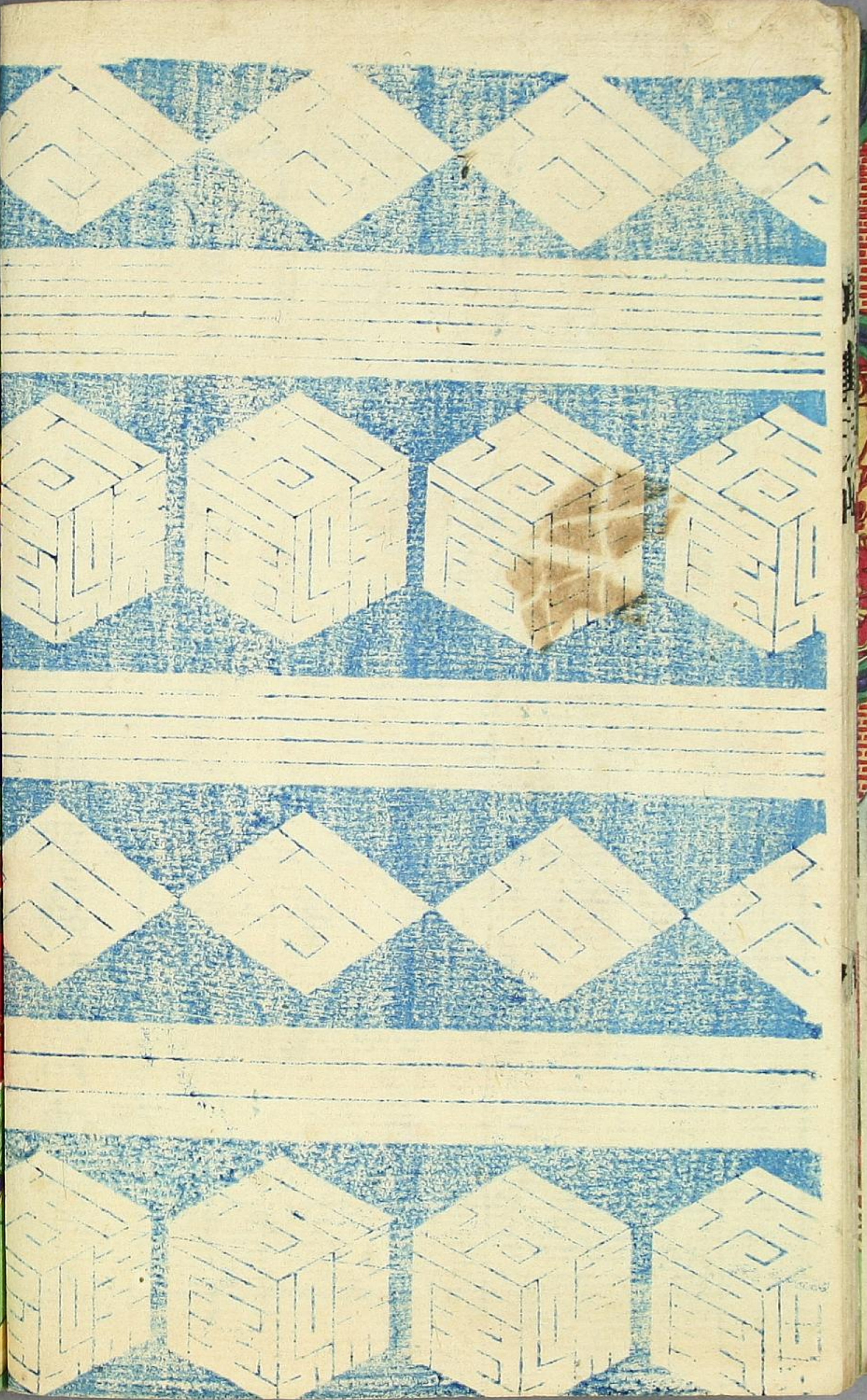


ろのと  
まの相を女園子の境代  
義及いよこころの

あつた今更承の月日くね  
母子にさすくは世うと受  
ハ今更娘にさすくは秋  
宗祖の山得あつた

お社へ秋のり外  
小情まの東を  
あつた秋のり  
あつた秋のり





上の巻よりついで  
 女犯の罪を重くせしむるに  
 院の儀にあらうか國寺と遊ばれんとす  
 此の儀にあらうか國寺と遊ばれんとす  
 此の儀にあらうか國寺と遊ばれんとす

免しと交ておぼへ  
 我乃かおぼへらう  
 市村の儀にあらう  
 羽衣の儀にあらう  
 羽衣の儀にあらう  
 羽衣の儀にあらう



日頃の儀にあらう  
 と後の儀にあらう  
 今も儀にあらう  
 今も儀にあらう  
 今も儀にあらう  
 今も儀にあらう



通壹西目  
 今も儀にあらう





二種計りの用遠く切小  
 進むま婦がめくはむき解  
 さる由解りあつた家の毒と  
 娘が破るを敷敷と傾け  
 是のよやま

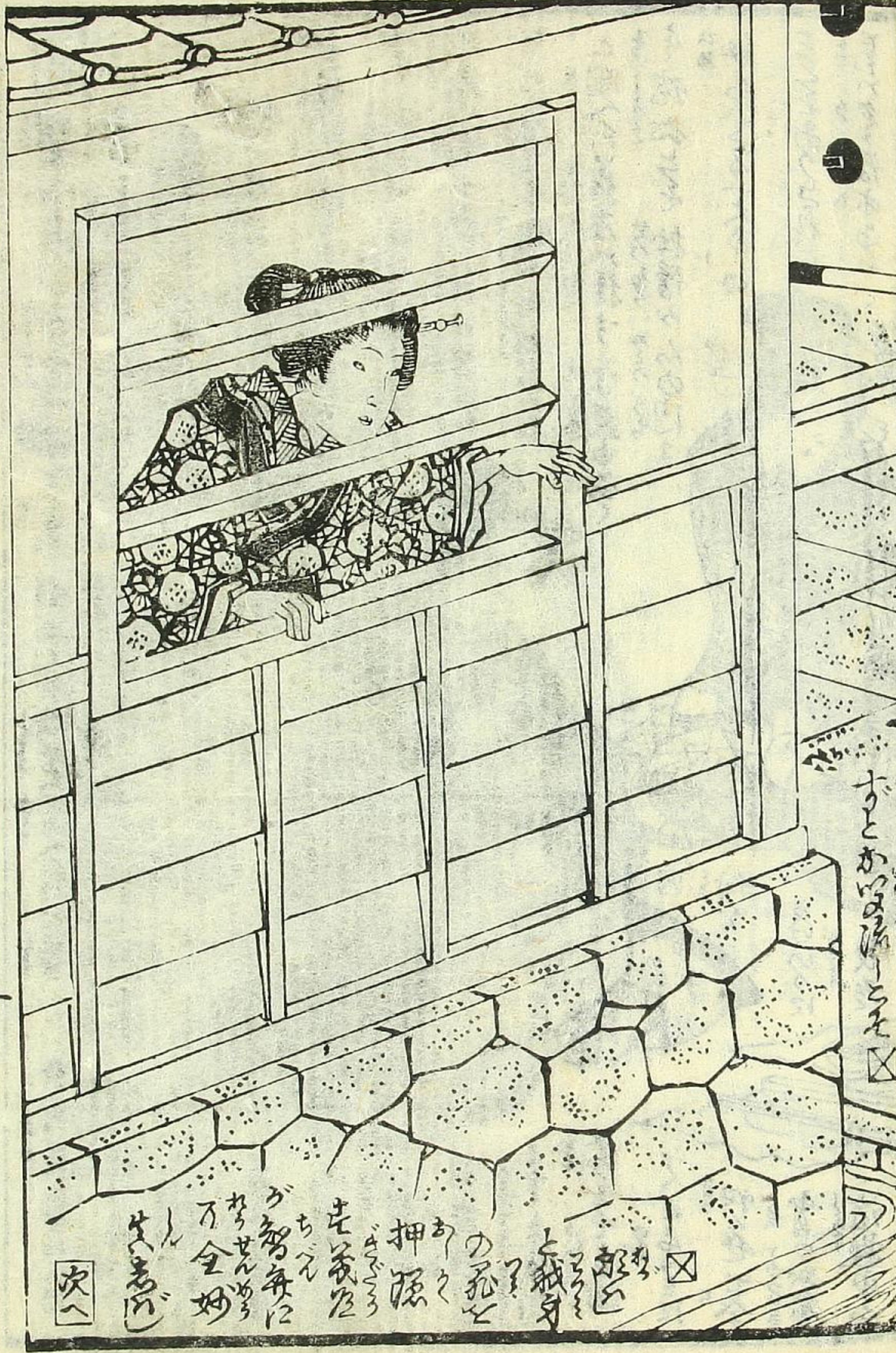
彼亦へまを出入の身と納く思傍を父母毒うつと  
 女と平侍様もあつれず四五日ちて酒者をととの  
 毒屋ま婦が宅へ火返れ余又一破破くさる正のあり  
 えううまき之飲酒戒を破りしと信せあれは解りは小  
 送るつ解り後左亦あつて由云海



小間物屋喜兵衛

この密さる世  
 むねをい不溜世  
 るのららららら世の  
 人の心戸へとられ  
 ちとあはれ

あそ  
 破  
 娘  
 りられど



の私を  
 押強  
 走後  
 ち毎に  
 が智毎に  
 不全妙  
 失





つぎ 新儀はき件と海の前を  
 名せなる宗親對 世  
 ありと只平伏する  
 けりありり合ふ  
 いのちもて  
 今とあり云  
 つけき



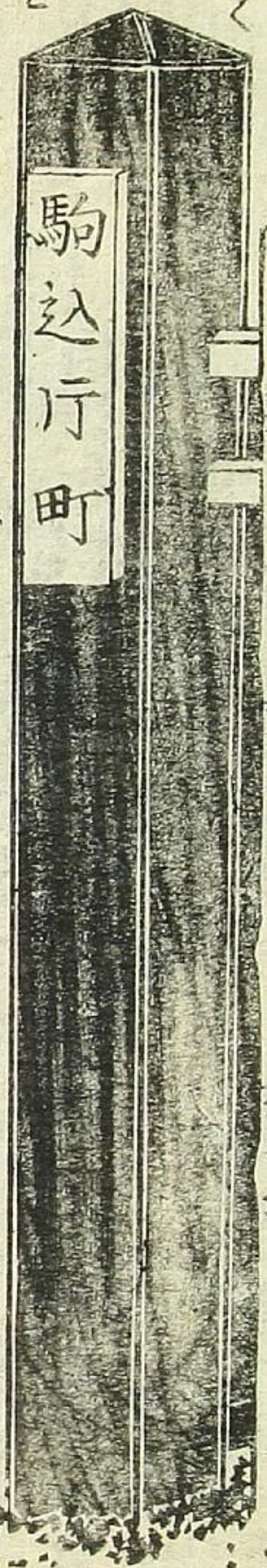
法水  
 裏門  
 遊子  
 紋  
 止め  
 上  
 色  
 又  
 轆  
 後  
 如



つぎ 新儀はき件と海の前を  
 名せなる宗親對 世  
 ありと只平伏する  
 けりありり合ふ  
 いのちもて  
 今とあり云  
 つけき

天照おん神八  
 情ま田三十書律法  
 兼書儀の律と律  
 宗祖由上後何是上  
 人失礼也先未れと  
 心切らるる義乃  
 年任夜と  
 心切らるる義乃  
 心切らるる義乃  
 心切らるる義乃  
 心切らるる義乃

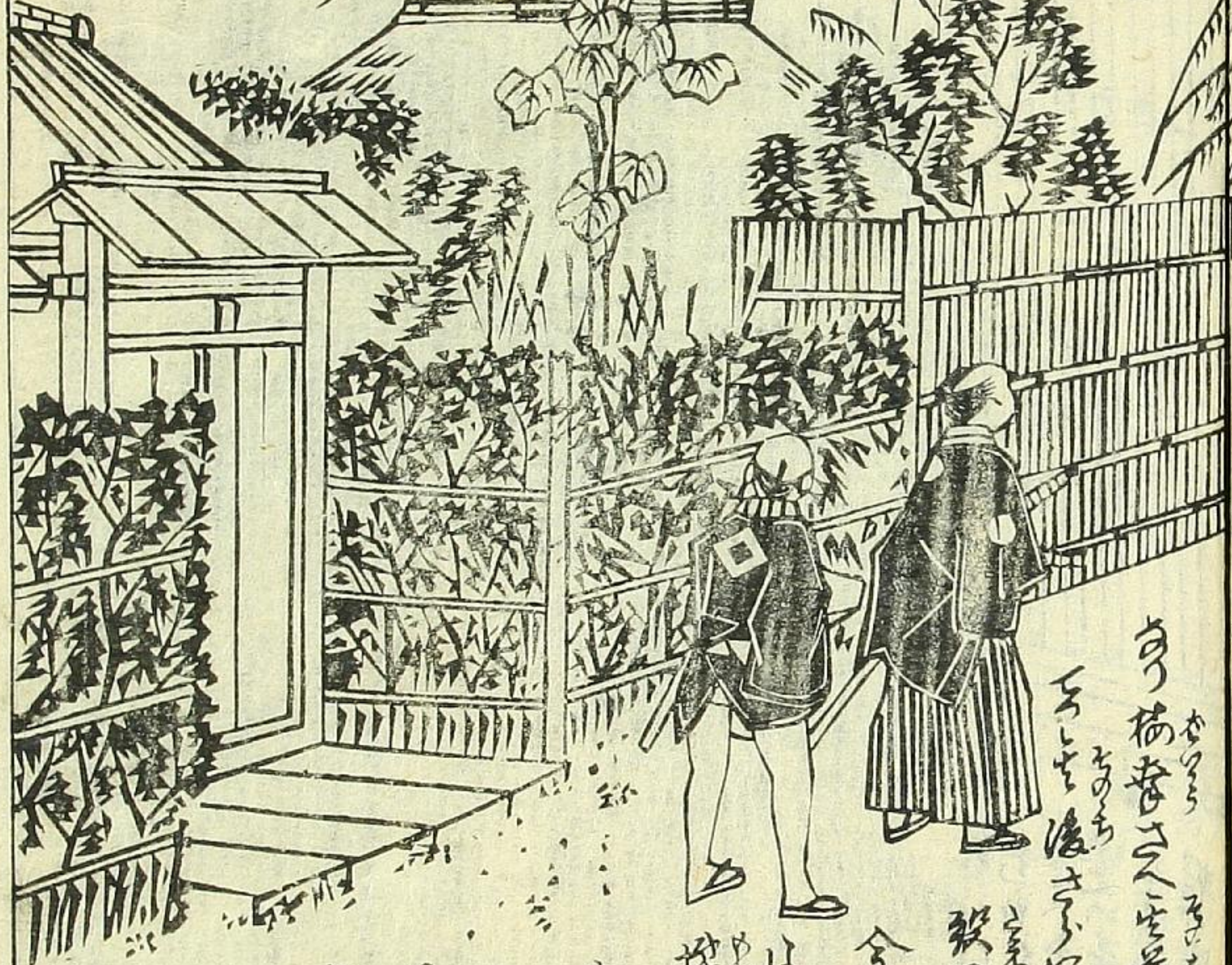
一物区上人はめ  
 り全妙出ふ教え  
 合せを教ふる  
 けり後及  
 いま怪ふと



へり下りたる波女と見えせむつるも我破戒の  
 死科と氷解させんけりゆとれと失ふふ  
 跡はさりと替へ親とゆあけとて  
 然地あり上人の義友のまどとち我憐つて  
 その方と疑ひ返しゆくも後悔され  
 ぬる情を改めたるを破戒の  
 死との元受ふにそ方  
 一人死する間の一山の如く

あまの心へ人よ下りてふれりて旅不とぬ  
 一室小情とめませんと淫和を改てま城の  
 竹と破戒の死とのれ不忠儀は淫和の借とありぬ  
 義道が利業の針らひと淫和を改てま城の借とありぬ  
 淫和の始を改てま城の借とありぬ  
 りのよまはぬ二人の男持同く知合ふて義友の

辱より今いふ由候りほ  
 えの蔵小後へ上高も  
 お法小背くると宛  
 仁大後の上人が酒小  
 り全妙生のも今受え  
 と面目あくまをと  
 笑ふ義備はこそく  
 とこそ返出せ  
 ○叔の義及ハ彼おとと  
 密會しつる折うらふり  
 七五回下坂屋の内ま  
 備優梅寺と名合しう  
 お社母子の落情と



あり梅香の生落情ととと  
 五とを後さうに性来之小  
 義の描のたてて  
 今あんとよる  
 はやく品を  
 探けりあれど  
 お社母子は後月  
 満て御生年  
 明和元年甲  
 申の三月の  
 法に梅香の安  
 く生落しと  
 拙の次へ





つぎ 引入をてはは親方よ  
 父あふされし由はは  
 娘が起つるよふあは  
 私一が欲は迷ふ針り  
 今更此由ははとらば  
 孝道子供の昔育ま  
 出来ざればと教ぎられ  
 熱ま由今ふああり  
 兼し母子の困難なる  
 りまを打明を教む  
 是まどの仕へは  
 むべきあれど  
 頼るは乳

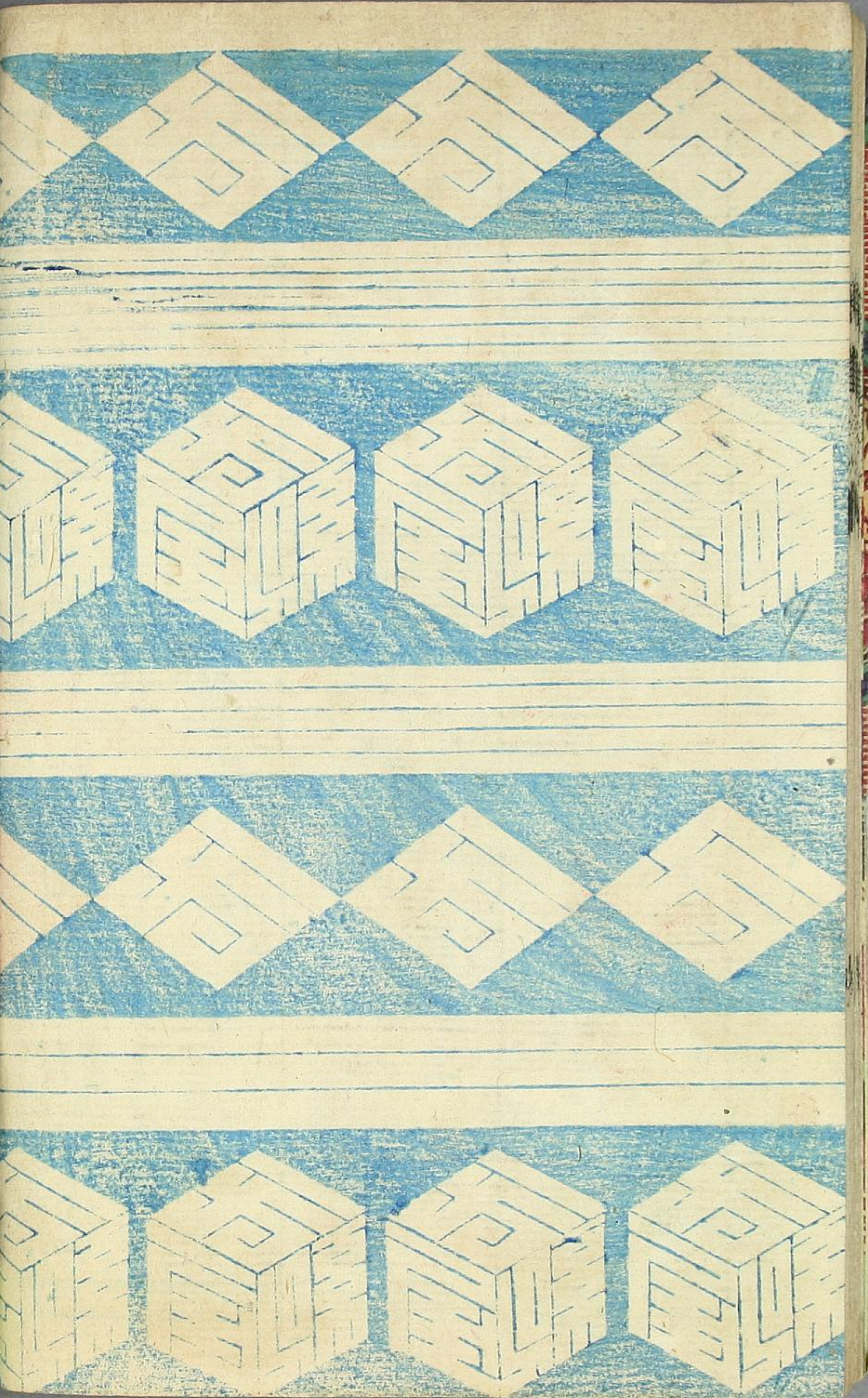
のこ子  
 不夜  
 のめ  
 とあひ  
 一か  
 ありせが  
 頼るは乳  
 ぐひては子の

八次  
 延命燈小江戸草履町市村  
 徳經の役と初む悴丑の奴  
 とありびつあそふ(芝居年代記)  
 小萩の役と初むとありびつあそふ

浮世繪師 勝川春章  
 の画風せうせうあり

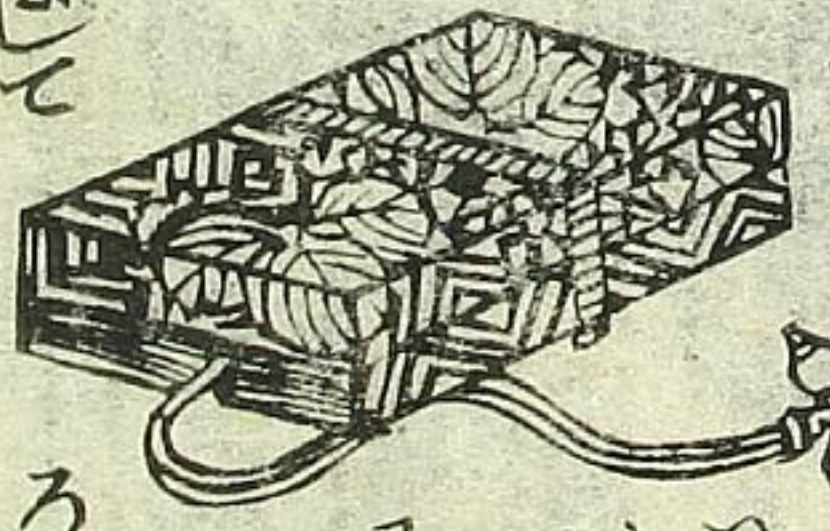
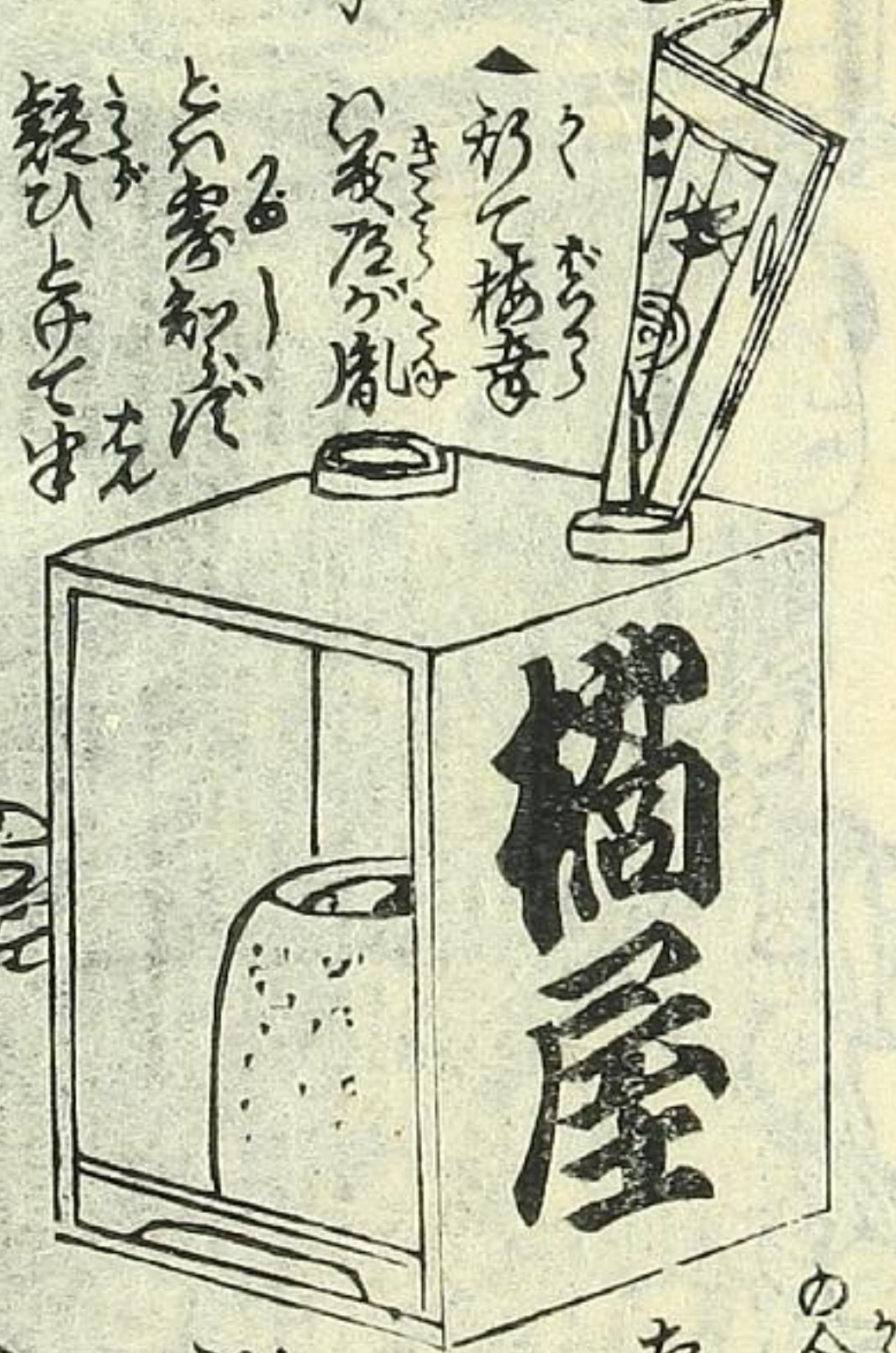




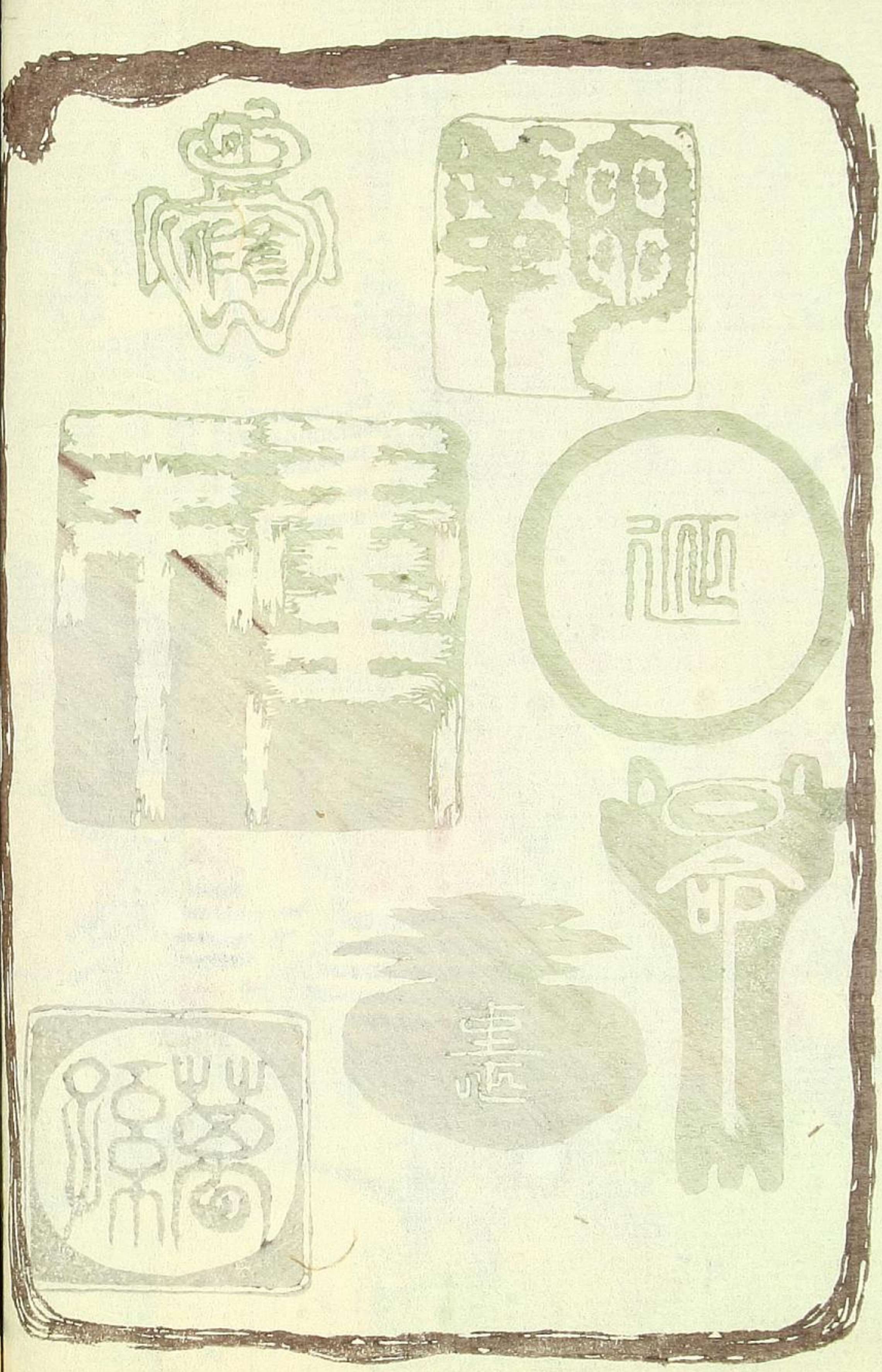




中... かねが... 解... 院...  
 代... 密通世と...  
 人の... 青...  
 今... 子...  
 さ... 誰...  
 あ... 疑...  
 七... 親子の...  
 実... 掃...  
 妻... 子...  
 産... 子...  
 後... 子...  
 親... 子...



元... 如... 如...









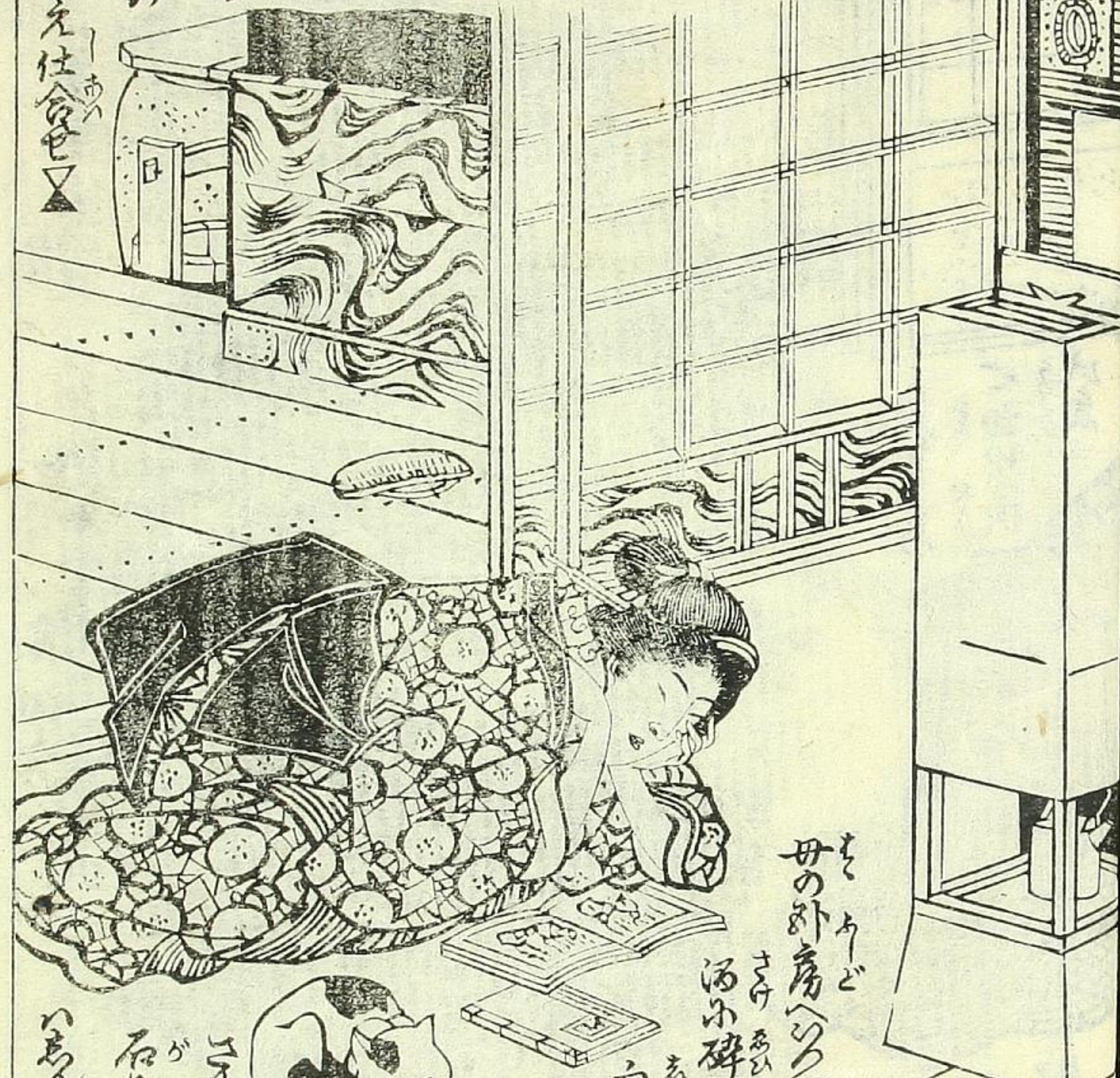
浮城物語

母あり廿六日  
 小碓ひて  
 席小入り又ハ  
 夜ごと小必  
 持ぎの家  
 小とそ病  
 らさねバ  
 お社いつふ  
 子小添乳  
 のまふ



母の助  
 石小  
 白川の夜  
 母の助  
 石小  
 白川の夜

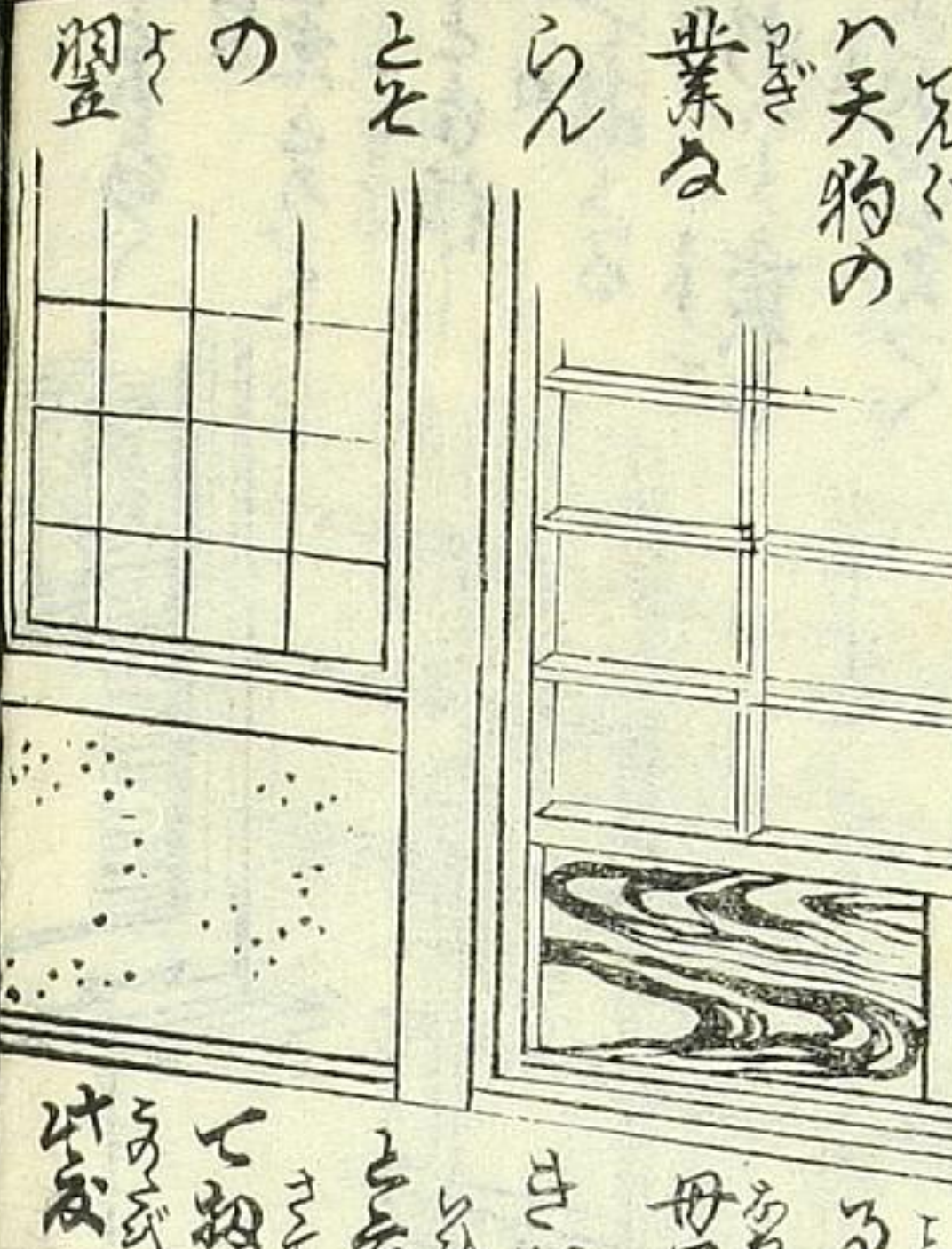
母あり廿六日  
 小碓ひて  
 席小入り又ハ  
 夜ごと小必  
 持ぎの家  
 小とそ病  
 らさねバ  
 お社いつふ  
 子小添乳  
 のまふ



母の助  
 石小  
 白川の夜  
 母の助  
 石小  
 白川の夜

お徳母子の事さうぬ狗のつゝの  
 こゝろあげて家内いふもの  
 出来の濃く迄探し

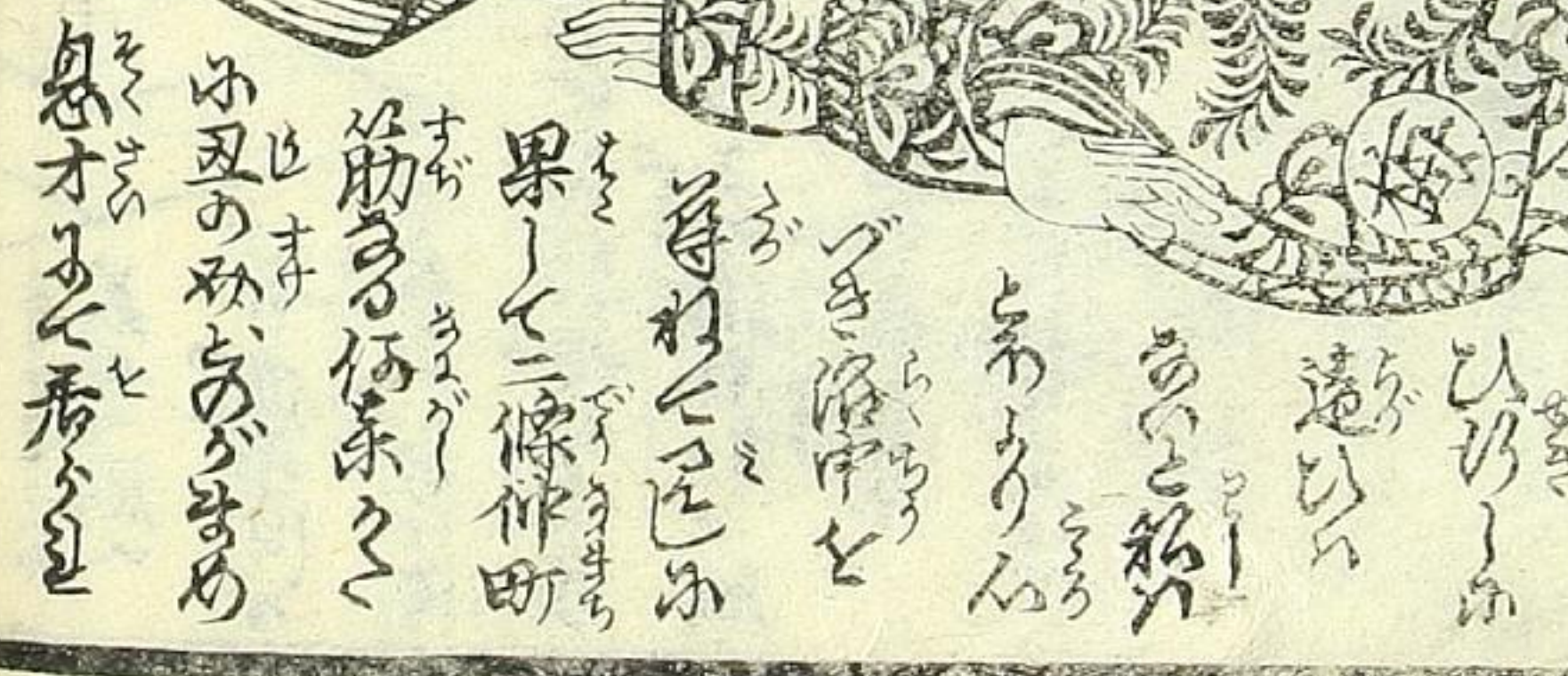
これと云ふは弟の  
 知とされば大方  
 彼林強はさる  
 されさうは  
 天物の  
 業々  
 らん  
 とを  
 の  
 聖



十日分の月数  
 と短てあせの  
 件は尋ねまの  
 彼林強一の  
 母子の款  
 母を待たせ  
 母を待たせ  
 母を待たせ

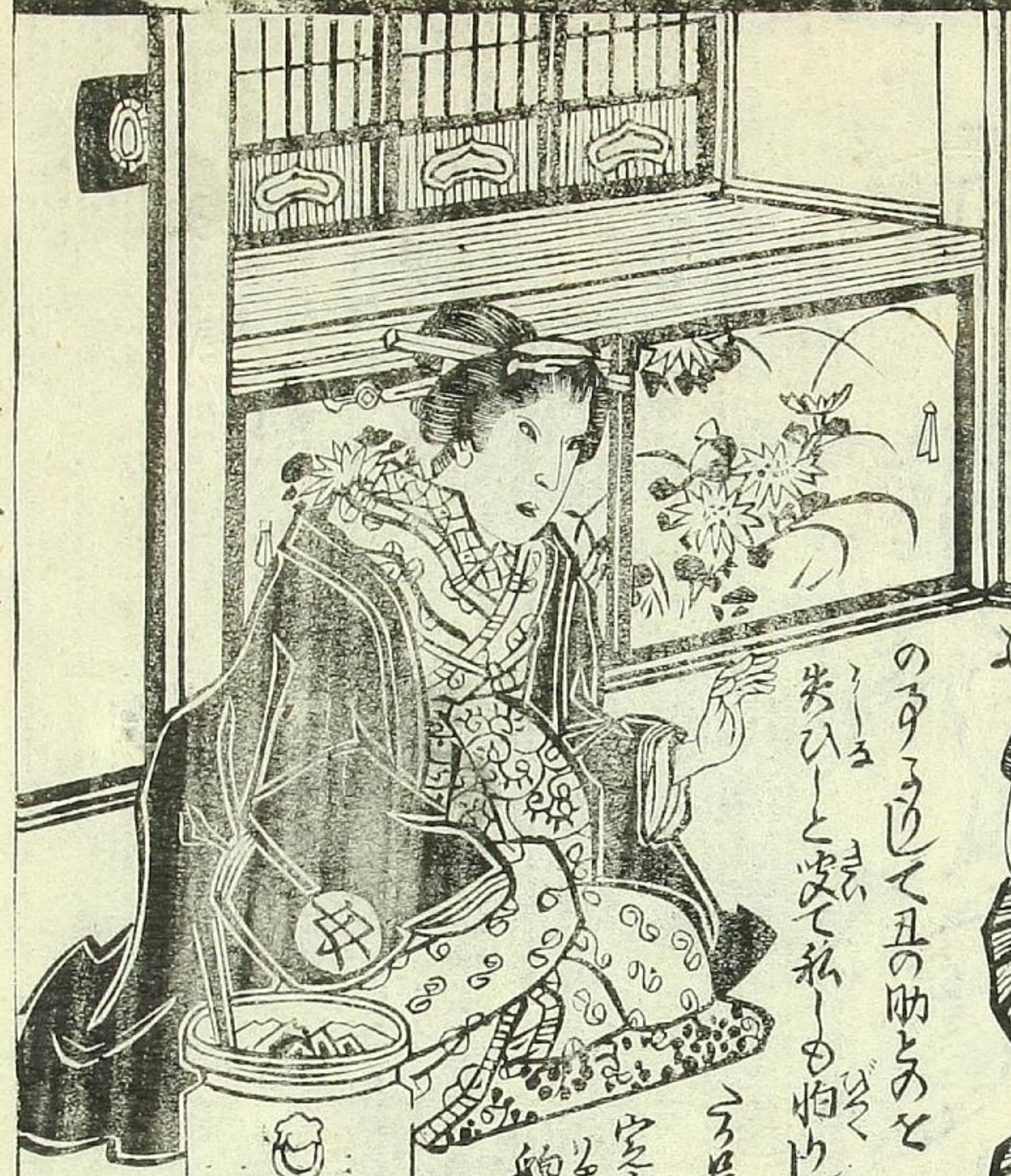


女ふとのつゝも徳  
 徳は徳入買の  
 徳は徳入買の  
 徳は徳入買の



徳文が町ある  
 梅音のた文も合

ふま  
 の事さうして丑の助とあそ  
 失ひと皮て私もの怖也



全千あまて去後  
 せしと正を小徳  
 文迄を甘さるこ  
 れは正徳を上小  
 術へ出か揚さそ  
 安と名と名  
 小か不脱内八梅  
 安との只徳使そそ  
 宜らんとは失へまこの  
 狗と愛のつれたれ計ひ  
 丑どのい返さると具中徳せか因



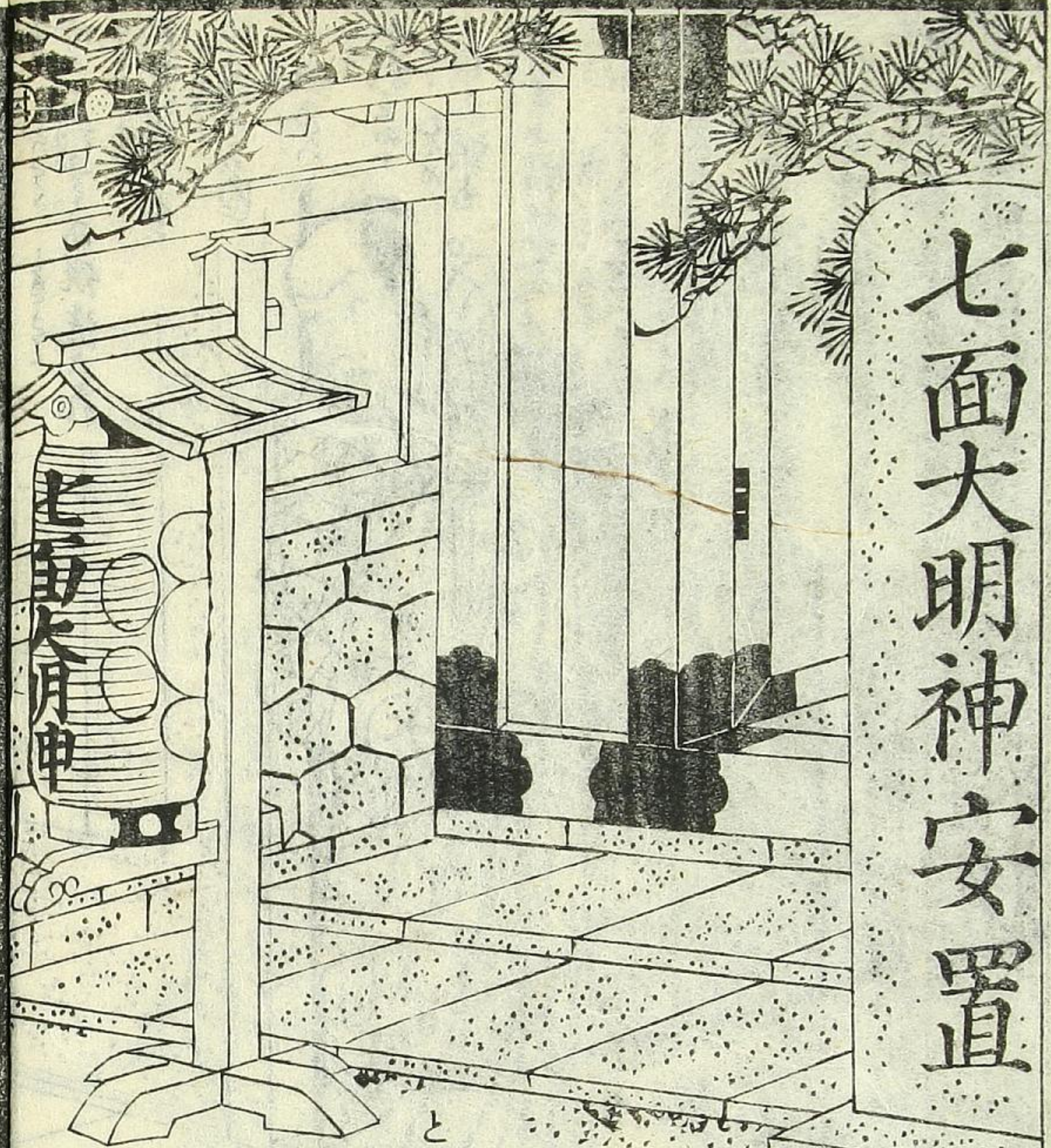




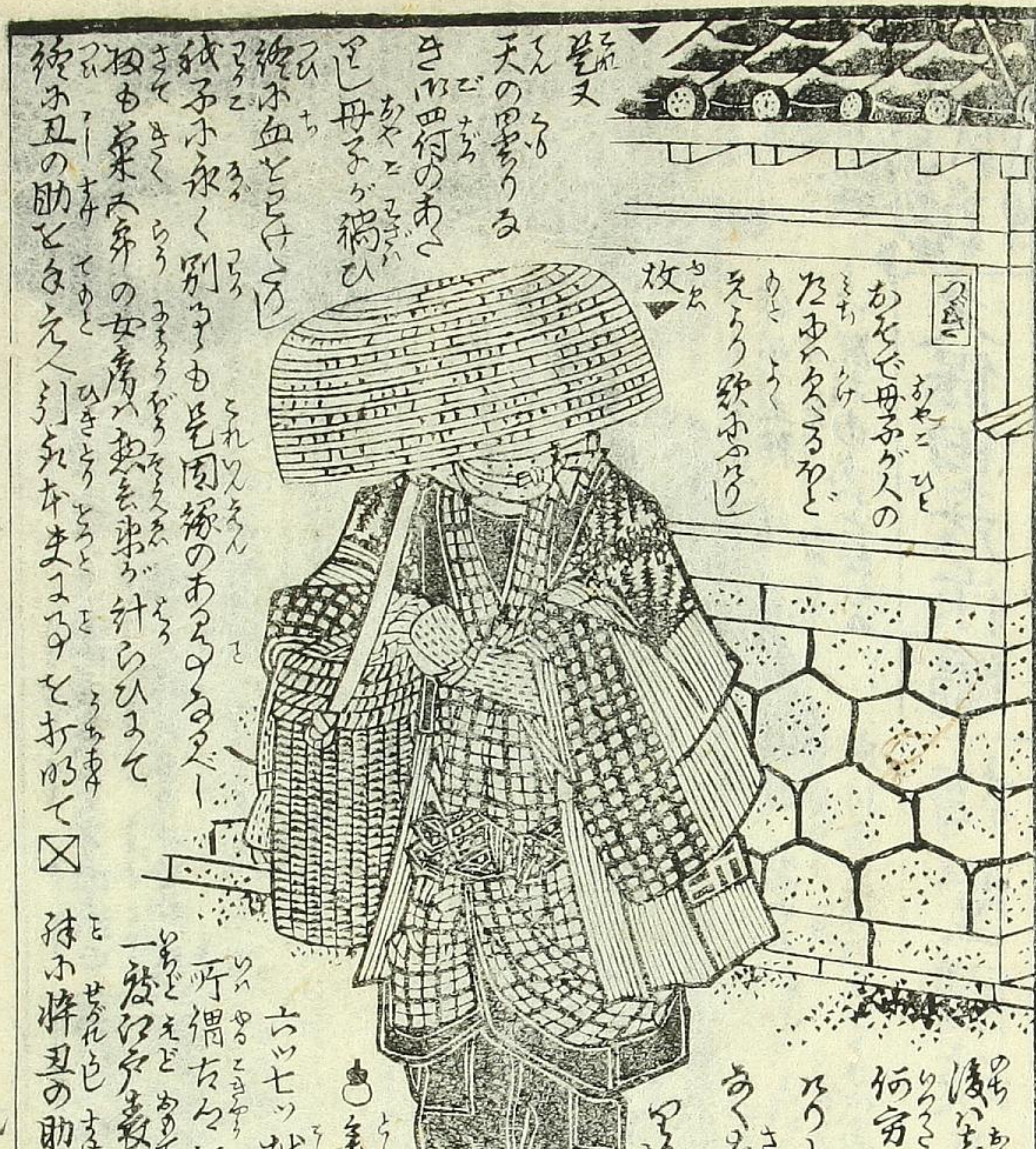
# 七面大明神安置

院命延

中 詳



吉田と撰ひ  
 表白梅香が子あり  
 といと良常宮ふ弘めは  
 て二代の徳本と云ふ  
 りり是より考ふる  
 お神の教書の合と  
 さらせし上りてまよ  
 母子の縁と切りその



天の田ありま  
 きり四付のあり  
 母のつら  
 後小血と云ふ  
 後子小永く別りし由是固縁のありありあり  
 ねも兼天身の女房の熱き糸が針ひひきて  
 後小丑の助と云ふ人別れなまよるすを打明て

後小丑の助と云ふ人別れなまよるすを打明て  
 六ツ七ツ裁の白髪の梅香ハ  
 所偶々々と云ふ事と云ふ物と云  
 一髪は髪を縁と借りてありは  
 後小丑の助と云ふ人別れなまよるすを打明て

つぎ男あつたて法流をたつた流の  
 及ぶあつと拙るるべ文書の中々絶優  
 中より及ぶ老るればあり年十五と成  
 りればはてしなく 素の 松林をた

日幕府のち直参森野元次郎  
 後小延命院の所化柳全とる  
 こと後の巻は委しく説へ



久保田彦作編 梅堂國政画

久保田彦作編  
 梅堂國政画

市村新八選以てまはる人上家徳是源及今  
 久保田彦作編  
 梅堂國政画

鳥追阿松海上新話

魔島一夕話 三冊より切

大日本物産圖會五帖

双六のあそび

田舎源氏五十四帖式帖

圖扇 文金 水鏡文  
 山水画 水好乃竹

東京二十六景一帖

大黒種志録

分

味漢洋書籍  
 東錦繪地本

問屋

編輯人 久保田彦作  
 出版人 大倉孫兵衛

出版御届明治土年 十一月十九日

第天 廿之區 宿下四丁目 二番地

